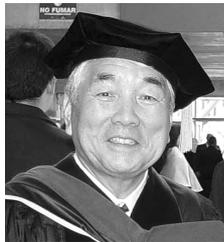




留学生への激励



トロント大学 名誉教授

西里静彦 (にしさと しずひこ)

1961年、北海道大学大学院文学研究科修士課程修了。1966年、Ph.D (ノースカロライナ大学)。マッギル大学で研究員、トロント大学、オンタリオ教育大学院大学で准教授、教授を歴任。著書は『行動科学のためのデータ解析』(単著、培風館)、など、和書5冊、英書6冊。

最近是中国や韓国から北米への留学生の数が急激に増え、日本からの留学生の数は極端に減少しています。カナダ政府はカナダからの海外留学が学部学生の12パーセントしかない(2009年の統計)と心配していますが、日本の場合、その数は2.6パーセントという近年の統計があります。この大きな違いは何処から出てくるのでしょうか? それはともかく、事実上、カナダでも日本でも大学の実験室、実験装置は完備され、海外の文献も労せず手に入ります。したがって、留学せず日本にとどまっても望みどおりの勉強、研究ができるという主張には、反対する余地がないのではないのでしょうか?

これに対し日本から外国へ留学するとなると、日本を離れて生活するストレスがあり、さらに言葉の違いとたくさんの宿題が課せられる生活が待っています。私も留学が現実となった時、正直な反応は、喜びの陰に「いまさら辞退できない困った」でした。この不安は一般に通ずる心境で、これが留学の歯止めのひとつになっているかもしれません。

しかし多くの留学生は、選ばれたという自信や、誇り、大きな夢を持っています。そして留学が終わり、何年後かには「あの頃はよくやった」という自分の努力に対して驚嘆し、自己満足を味わい、若き日の苦難に満ちた生活を懐かしく偲びます。

このような満足のゆく達成感

多くの留学生が体験することで、若い時に生活環境の違うところで異文化に育まれた人々と生活を共にした経験の重要性をみな痛感しています。苦労はあっても留学も悪くはなさそうだと、自分もやってみようと思つて決心する人がいればと願いつつ、私の経験をつづります。

和製英語のくい違い

留学生活で、まず表面化するのには言葉の問題でしょう。和製英語には通じないものがたくさんあります。「マーガリン」は奇妙なことに「マージョリン」と発音、「ブザー」は「バザー」、「コンセント」は入れられるほうは「アウトレット」、入れるほうは「プラグ」、「ワイシャツ」は「ドレスシャツ」、「ズボン」は「パンツ」または「トラウザーズ」、「チャック」は「ジッパー(ズイッパー)」、「グレイドアップ」は「アップグレード」、「リストアップ」は「リスト」、「ガードマン」は「ガード」、「マグカップ」は「マグ」など。また「スマート」は体型がすらすらとしているというよりは頭が良いという意味合いで使われます。

アクセントの違いでは「アドヴァイス」(アが強音)ではなく「アドヴェイス」(何故この誤りが日本のマスコミに広がったのでしょうか?)、「ボラ~~ン~~ティア」ではなく「ボランティア」など。しかしこれらは留学生活の中で自然に身につく解消します。

強く根付いたものとして「大リーグ」は「メジャーリーグ」ではなく、正しくは「メイジャーリー

グ」(メジャーは稱、メイジャーは大リーグの「大」でマイナーリーグに対するもの)ですが、日本のマスコミに限らず、北米で野球に関係している日本人さえ「メジャー」と発音していて、困った恥ずかしい誤りです。何とかならないのでしょうか? 「マンション」も「アパートメント」か「コンドール(コンドミニアムの略)」が正しく、これも広く使われている誤りです。

英語の聞き取り、読解のコツ

しかし、これらの「くい違い」は、留学生にとって大きな問題ではありません。留学生がまず直面する言葉の問題は、「講義に出てどれだけわかるか」です。「予想以上にわからない」ことが、一般的な経験です。アメリカでもカナダでも、講義中の居眠りは見かけませんが、たとえ居眠りをせず、授業に熱中して耳を傾けても残念ながら「あまり聞き取れない」というのが普通で、驚くことはありません。

これを克服するためには講義をテープにとらせてもらって、授業のあとテープを何回も聴き、講義を英語の文章に1語1語書き下ろすことです。いったん書き下ろしてから、テープを聴くと驚くなかれ、英語が実によくわかります。一度試してください。これを繰り返すと、英語を聞く耳が高速度で育ちます。

ほかには、「英語で読んだことは頭に残らない」ということも、留学生一般の問題です。宿題で毎日何十ページも読まれます。クイズと称して、通常の試験より小

規模のテストがしばしばあり、それが読んだことに関する時は大変です。細かいことなど全く頭に残っていません。

この話をしたら、イスラエルからフルブライト留学をしていた同期の留学生のアムノン・ラポポートが、「本を読みながら、キーワードを書き残せ」と言ってくれました。本を読んだあとキーワードを見ると、確かに不思議なほど本の内容が浮かび出ます。この方法は大変役に立ちました。

英語で発表するとき、初めは心配が多いと思います。しかし書いたものをそのまま読むことは避けてください。パワーポイントの各ページは要点だけにして簡潔なものを作成し、自分のコピーにキーワードを数語書いておくと、それだけで発表を流暢に進めることができます。話すことを逐語用意する必要は毛頭ありません。人間の脳の働きにある素晴らしい統合力を駆動してください。

日常の会話では相手の話が聞き取れなかったら何回も聞き返すように、と言うことは誰でも承知していますが、日本人の多くの場合、生来の礼儀正しさが先に出て、「何回も」を実行できません。話の途中がわからない状況をそのままにしておくと、ますます話がわからなくなりますので、度胸を出して何回も聞き返してください。失礼なことではありません。一対一の会話は比較的わかりやすくても、大勢との会話は騒音もあり、注意の散漫もあり、理解しにくいものです。

私は英語力の試験で、どれだけ騒音を入れると会話が理解できなくなるか、というような形でヒアリング能力をテストすべきだと思います。騒音の中の日本語はわかるが英語はわからないという現象は、海外で暮らす日本人の経験です。また日本語の歌なら注意

せず聴いていても歌詞を自然に覚えられますが、英語の歌はよほど注意して聴かなくては歌詞を覚えられません。このようなことも英語のヒアリングの試験に取り入れては、などと考えます。

英語独特の表現法を習得するために

次は英語の作文の問題です。カナダの公用語は英語とフランス語で、何を買っても商品には英語とフランス語の説明文がついています。両者を読みますと、同じことを伝えるにも英語とフランス語では表現の仕方がずいぶん違っているのをしばしば見かけます。ましてや、これに日本語を加えるとすると、どういう表現が出てくるでしょうか？

ここに言語と表現の違いの問題が浮上してきます。日本の学校では英語の文法をしっかりと教えてくれますが、限られた時間にどれだけ英語独特の表現法を教えることができるでしょうか？ 一般に日本人留学生の書く英語は、文法的に見ると正しくても、表現や単語の選択がまずいことを、これまでしばしば見てきました。

英語の表現力を身に付けるためには、英語の小説をたくさん読む、英語の新聞を毎日読む、英語のテレビ番組や映画を見る、英語の学術誌に投稿して、何回もの棄却、書き換えを繰り返してもまれる、というようなことが必要です。これは時間と経験を要しますので、留学当初に解決できる問題ではありません。しかし留学はその勉強過程として最初の、かつ最適の機会を与えてくれます。

厳しくも温かいアメリカの学生生活

さて毎日の生活はどうでしょうか？ 私が大変恵まれていたと思うのは、私の留学先だったアメリカ南部の大学町チャペルヒルは、生活がいつも大学構内に集中していたことです。寮から大学のキャ

フェテリアに行く途中、快活な女子学生が気楽に笑顔で声をかけてくれました。一人で食事をしていると、誰かれかが隣に来て話しかけてくれました。「今日はパーティーがあるから」といって誘いがきました。これはアメリカ南部のホスピタリティであるとばかりはいえません。多くの留学生が体験しています。

チャペルヒルでは東京の聖路加国際病院を建てた私のホストファミリーのリングウオルト家の皆さんが絶えず私の学生生活に関心を持ってくれ、私のために大学に足を運んでくれました。アメリカは留学生をこれほど大切にしてくれるのかと、驚くばかりでした。同時に、実験心理学のキング教授は私が英語の綴りを間違う度に2点減点、私の答案には各所に赤インクの「-2」が見え、アメリカの学生は私に同情し励ましてくれました。

このように大学の中のアメリカ社会は親切であり、同時に厳しいものです。たくさんの本を読ませるリーディングアサシメントという宿題には苦勞しましたが、その教育効果は絶大でした。これらが私をますます、アメリカびいきにしてくれました。

大学院には当時、修士、博士課程の区別が無く、私は博士論文を志望、その修了に4年かかりました。苦しく、かつ楽しい生活でした。授業の成績はHがハイパス・クラスで一人か二人がこれを取ります。次が多くの学生が取るPでパス、次は数人が取るLのロウパス、最後がFで落第。Lを三つ取ると自動的に放校でした。私は一年目の一学期に実験心理学とパーソナリティで二つのL、一緒に楽しく勉強した級友メイはL三つでクリスマスのある大学を去りました。

幸い、因子分析で時系列因子模型を提唱してH、二学期には数学

科の三講義がすべてHで一年目は無事修了。二年目からはアメリカ式の授業に適應できました。三年目の一学期には学位のための全域にわたる試験に不合格、辛酸をなめましたが、四年目に合格。論文のテーマをボック教授のプロジェクトから選ぶと、彼はすぐ全額支給で私をフィラデルフィアの学会に派遣し、多くの研究者を紹介してくれました。論文の最終口述試験は計量心理学教授4人、数学科教授2人の試験官。数時間にわたる難問の連続にもうだめかと思いましたが、驚いたことにボック教授が私を弁護してくれました。最後には全員が笑顔で大手を広げて祝福してくれ、その時の感激は今も忘れません。苦勞あつての喜びでした。

教えられる側から、教える側へ

教職に就いたカナダでは二十数人の修士論文と博士論文を指導しました。ほとんどが博士論文で私の研究プロジェクトに関するものでした。自分のプロジェクトなので学生任せではなく、一緒に仕事をしました。研究体制は、学会発表を指導の一部に活用し、旅費を研究費から工面して学生とともに学会に出席し、時には学生に発表させました。それにより期限に間に合わせる研究体制ができ、かつ学会で多くのフィードバックを得ることもできました。学生の論文は英語圏からの学生のものも、留学

生のものも、徹底的に添削し何回も書き直させ、簡潔な論文ができるまで論文を受理しませんでした。

私のプロジェクトに関係ないテーマを選んだ学生は二十数人のうち二人だけ。その二人とは学会の共同発表も無く、論文の完成も長引きました（トロント大学では1960～80年代には論文完成までの提出期限がありました。その後、就職難が悪化、論文修了前に就職する学生が出るということで期限が廃止されました）。

学生時代と教師時代の経験から言えることは次のことです。海外の大学院入学応募では、通常、研究テーマを書くことが要求されますが、いったん入学が決まったら、できる限り指導教官の研究プロジェクトに関心を持ち、プロジェクトに関係したテーマを修士、博士論文のために選ぶことです。

もちろん、その関心を指導教官に伝えると喜んでテーマを提供してくれる場合が多いものです。共同研究では学会参加の費用を捻出してもらえる可能性のほか、学会での発表、プロジェクトのプログレスレポートなどを通じて、徐々に論文の完成が近づきます。

もしほかに興味ある話題があるなら、論文修了後に自分の研究テーマとして研究すればよいのではないのでしょうか？ 教官の立場から言いますと、学生本人が興味を持つ話題を論文のテーマとして持

ってきて論文を書きたいと言われても、普通はあまり乗り気になりません。問題が面白くない、重要に思われないということではなく、自分がその研究課題の専門家ではない、ということが往々にあるからです。

さて、これまで書いたように多くの難題が留学生の前にあります。いちばん大きな言葉の壁は、長年海外に住んでも無くなりません。私の場合、何年海外にいても、英語を母国語とする家内のように、訪問客があると「あの人はボストンアクセント、シカゴアクセント、カリフォルニアアクセント」だとか、英語をきいて「あの人はポーランド出身、ロシア出身、チェコ出身、ブラジル出身」などという判断はできません。一生をかけた努力が必要です。

国が違えば考え方も違い、留学により思考範囲が広くなり、海外の学会で発表する機会も増え、多くの知己を得られます。留学には冒険の側面と不透明の世界がありますが、同時に得ることも豊富です。ぜひ海外の奨学金にも応募し、羽を広げてください。大きな世界が手を広げて貴方を待っています。留学してもいつまでも日本の良さを持ち続け、日本と海外で大いに活躍してください。留学という冒険を、若い時代のチャレンジとして捉えてみてはどうでしょうか？

読者の声

■ 57号を読ませていただきました。特に北海道大学の仲先生の記事、大変楽しく読みました。研究者は子育てする女性には難しいという声がある中、工夫されて楽しく子育てされていたことがよくわかりました。私も現在一女の母であり、来週

から3年間、主人と娘（6歳）をつれて、私の仕事の都合で米国に3年間赴任します。不安もある中、仲先生の記事で元気が出ました。今後もこのような子育てをされた先生方の記事を載せていただけたら嬉しいです。（女性、外務省国連日本政府代表部）

読者の声 投稿募集中！

「心理学ワールド」への、ご意見・ご感想をお待ちしています。

●送付先 〒101-0051 千代田区神田神保町2-10 (株)新曜社 第一編集部 morimitsu@shin-yo-sha.co.jp
投稿は、お葉書・Eメールどちらでもけっこうです。世代と性別をあわせてお知らせください。